

海員組合の元執行部・金森洋輔氏が講演②

自身の歩みを振り返りながら、日本の遠洋漁業と船員の歴史を語る
戦後の船員が日本の食を支えてきたことを伝えたい

7 月 12 日、広島県尾道市向島町の尾道市民センターむかいしま「こころ」で、向島公民館サークル「今を楽しもう会」の主催する講演会が開催され、元組合執行部の金森洋輔さんが『獲物を追って（遠洋トロール）激闘 海に生きた男の記録』をテーマに講演し、約 100 人が耳を傾けた。

～遠洋漁業とともに歩んだ船員人生～

講演の冒頭、金森洋輔さんは幼少期を振り返り、満州で生まれ、終戦後に引き揚げ、養子として向島で育った経歴を紹介し「人との縁に支えられて今日まで歩んできた」と感謝の気持ちを語った。

次に話題は、戦後間もない日本の海運・漁業へ移った。

戦時中には、多くの商船や漁船が徴用され、船員の犠牲者は約六万人に上った。船員全体の約 43%が命を落としたという数字は、戦争が海運業界にもたらした被害の大きさを物語っている。神奈川県横須賀市の観音崎公園内で毎年執り行われる『戦没・殉職船員追悼式』にも触れ、海で命を落とした多くの先人への感謝と慰霊の思いを語った。

戦後、日本は国内だけでは十分な食料を確保できず、深刻な食糧不足に苦しんでいた。そのためマグロはえ縄漁業、北洋トロール漁業、母船式サケマス漁業など、日本の漁船団は世界中の海で操業し、多くの魚を日本へ届け、遠洋漁業は国民へ貴重なたんぱく源を届ける国家的な使命を担っていた。

「海員だより」